

四月上旬。真新しいスーツを着た新入社員たちを囲む歓迎会は、都内の少しお洒落な和食居酒屋の、広々とした掘りごたつ式の座敷を貸し切って行われていた。

一つ一つ明確な椅子で分かれているわけではなく、靴を脱いで畳に上がり、長机の下の窪みに足を下ろすスタイルだ。詰めればある程度人数の融通がきくため、あちこちで席の移動が頻繁に行われ、フロア全体が活気に満ちている。

社会人三年目となった私、高森麗（たかもりれい）のグラスには、すでに半分ほど減ったウォーターロンハイが揺れている。

見渡す限り賑やかな空間だが、その中でも一際大きな笑い声と黄色い歓声が上がっている場所があった。

「白石さんって、学生時代は何されてたんですかあ？」

「あー、俺？ サークルで少しフットサルやってたかな。でも大したことないよ」

「えー！ 絶対嘘だ！ 白石さんスポーツ万能そうじゃないですか！」

新入社員の女の子たちから質問攻めに遭い、涼しい顔でグラスを傾けているのは、私の直属の後輩である白石陽向（しらいしひゆうが）だ。

今年で入社二年目となる彼は、端正な顔立ちと高身長、それに加えてどこか余裕のある人懐っこい雰囲気で、入社当時から社内的女性陣の視線を独占してきた。今日も今日とて、配属されたばかりの新入社員の女子たちに完全に包囲されている。

少し離れた席からその様子を眺めていた私の同期の女子社員たちが、面白くなさそうに枝豆を口に運びながら愚痴をこぼした。

「あーあ、今年の新人ちゃんたちも早速『白石病』にかかってるわね。顔がいい男って本当に得」

「まあねー。でも顔だけじゃなくて仕事もできるからタチが悪いのよ。麗、去年一年間あの子の教育係だったんでしょ？ よくあの顔面と至近距離で仕事して正気保ってたわね」

「正気って大袈裟な。ただの後輩よ、後輩」

私が苦笑しながら答えると、ふいに背後から肩をポンと叩かれた。

「おっ、高森。今年も新人の面倒よろしく頼むぞ」

振り返ると、私たちの部署の課長が赤ら顔で立っていた。

「去年は白石の面倒、しつかり見てくれたもんな。あいつ、最初はちよつと生意気なところもあるかと思つたが、今じゃすつかりうちのエース候補だ。高森の指導が良かったおかげだよ。今年も安心して任せられる」

「いえいえ、私なんて何もしてませんよ。白石くんが元々優秀なんです」

私が謙遜すると、課長は「優秀だろ？」と満足げに笑い、グラスのビールを煽った。

「まあ、ちよつと生意気なところはありますけどねー」

私は冗談めかしてそう言いながら、女子たちに囲まれて愛想笑いを振りまいている陽向の方へ軽く目をやった。すると、どうやってこちらの会話を聞きつけたのか、陽向とバッチリ目が合ってしまった。

彼は新入社員の話を聞くフリをしながら、私に向かってこつそりと右目のウインクを飛ばしてきた。

相変わず、食えない後輩だ。

「課長、少しお手洗いに行ってきますね」

私は適当に会話を切り上げ、畳から立ち上がった。

お手洗いで少し冷たい水で手を洗い、火照った頬を冷ます。

会場の熱気とお酒のせいで、少し頭がぼーつとしていた。席に戻る前に少し外の空気を吸おうと、私は居酒屋の裏手にある、喫煙スペースも兼ねた小さな外廊下へと出た。

春の夜風が心地よく、火照った身体を優しく冷ましてくれる。

ふう、と息を吐き出した時、暗がりの中にスマホのバックライトに照らされた人影があることに気づいた。

「……あれ、白石くん？」

壁に寄りかかり、器用に片手でスマホをスクロールさせているのは、さっきまで店内で女の子たちに囲まれていたはずの陽向だった。

「あ、麗ちゃん。お疲れ」

陽向はスマホから目を離さず、全く驚いた様子もなくそう言った。

「麗ちゃんって呼ぶな。会社の人たちの前で出たらどうするの」

「大丈夫だって。ここ、俺たちしかないし」

陽向は悪びれる様子もなく、へらつと笑う。

これが、彼なりの距離の詰め方だった。入社して早々、私の教育係としての指導が終わった初日の飲み会で、「高森先輩じゃ堅苦しいんで、麗さんって呼んでいいですか？」とストレート

に聞いてきたのだ。

最初は「麗さん」だったのが、いつの間にか二人きりの時や、周りに人がいない絶妙なタイミングを狙って「麗ちゃん」と馴れ馴れしく呼んでくるようになった。

生意気だと思う。でも、仕事に関しては私の指示を的確にこなし、時には私のミスをさりげなくフォローしてくれるほどの優秀さを持っている。社会人三年目にしてこんなに手のかからない、むしろ頼りになる後輩を持てたことは、私にとって間違いなく幸運だった。だから、この程度の生意気さは、可愛いものとして許容してしまっている自分がいる。

「新入生の子たち、白石くんがいなくなつて寂しがつたよ。サボつてないで早く戻りなよ」  
私が先輩風を吹かせて注意すると、陽向はようやくスマホから顔を上げた。

「サボつてないよ。ちよつと休憩。あの子たち、元気よすぎて俺のペースじゃ疲れるんだもん」

「モテる男は辛いねー。で、何見てんの？ 女の子からの連絡？」

私はからかうように言いながら、陽向の隣に並び、彼のスマホの画面をひよいと覗き込んだ。

「いや、漫画」

陽向があつさりと画面をこちらに向けた。

「へえ、漫画……つて、ちよつ、これつ……！」

私は画面を見た瞬間、信じられないものを見てしまったように息を呑み、カッと顔を熱くした。

スマホの画面に大写しになっていたのは、男女が全裸で絡み合い、ひどく卑猥な行為をしている、いわゆる成人向けの『エロ漫画』のコマだったのだ。

職場の飲み会の途中で、しかも外の廊下で、こんなものを堂々と読んでいるなんて。

「白石くんっ、何読んで……っ！」

「え？ 漫画。俺、こういうの結構好きなんだよね」

陽向は全く悪びれることなく、スツ、スツと指を滑らせてページをめくっていく。

「好きなんだよね、じゃないでしょ！ こんなところで読むものじゃないでしょ！」

「いいじゃん、暗いし誰も見てないって。……あ、麗ちゃんはこういうの読まないの？」

陽向が、からかうような目で私を見下ろしてきた。

「よ、読まないわよ！ バカじゃないの！」

「ふーん？ でもこれ、女性向けのTL漫画だから、麗ちゃんも気に入るそうだけど」

「TLって……私には関係ないから！」

「まあまあ、そう言わずに。ちよつとだけ見てみなよ。絵、すっごい綺麗だから」

陽向は私の反発を気にも留めず、スマホの画面を私の目の前まで突きつけてきた。

「いいよ、見ないからっ」

私は顔を背けようとしたが、「いいじゃん少しくらい」という陽向のいつもの軽いノリと、ほんの少しだけ湧き上がってしまった好奇心に負け、チラリと画面に視線を戻してしまった。

陽向の言う通り、絵は恐ろしく美麗だった。

そして、描かれている内容は、私の想像を遥かに超えるほど生々しく、濃厚だった。

スーツ姿の男性が、恥ずかしがる女性の衣服を強引に剥ぎ取り、その柔らかな肌に赤々とした痕をつけていく。セリフの一つ一つがひどく卑猥で、画面から甘い吐息や水音が聞こえてきそうなほどのリアリティがあった。

「……っ」

私は完全に言葉を失い、画面に釘付けになってしまった。

頭では「見てはいけない」とわかっているのに、次がどうなるのか気になって、無意識のうちに自分から指を伸ばし、画面をスライドさせて次のページをめくってしまったのだ。

そこには、さらに激しく、直接的な交わりの描写が広がっていた。

「……ぷっ」

頭上から、吹き出すような笑い声が聞こえた。

ハッとして顔を上げると、陽向が肩を揺らして笑っていた。

「麗ちゃん、読まないって言ったくせに、自分でスクロールしたじゃん。めっちゃ真剣な顔して」

「っ……！ち、ちがつ、これはっ！」

私は全身から火が噴き出しそうなくらいの羞恥に襲われ、陽向の手からスマホをバンツと弾き飛ばすようにして押し返した。

「ばか！もう知らない！先戻るから！」

私は陽向の笑い声を背中で浴びながら、逃げるようにして座敷へと戻った。

熱気と喧噪に包まれたフロアに戻ると、さっきまで私が座っていた席には、いつの間にか同期の友人たちが移動してきて、長机の周りにぎゅうぎゅうに詰めて座ってしまっていた。

掘りごたつ式だからこそ、少し詰めれば何人でも座れてしまうのだ。今更「どいて」とも言えず、私は当たり前のように空いているスペースを探し、フロアの一番奥、後ろが壁になって

いて寄りかけられる端の席に腰を下ろし、長机の下へと足を滑り込ませた。

心臓がまだバクバクと音を立てている。

さっきの画面の光景が、脳裏にこびりついて離れない。

(……あんなの、白石くん、平気な顔して読んでたんだ……)

私は気を紛らわせるように、テーブルにあつた冷たいウーロンハイを一気に喉に流し込んだ。

五分ほど経った頃だろうか。

ふいに、私の隣の畳がわずかに軋み、誰かがスツと足を下ろして距離を詰めるように腰を下ろした。

「あ、ここ空いてたんだ」

陽向だった。

彼はさっき私がいた中央の席とは全く違う、この壁際の端の席に、まるでそれが最初から決められていた自分の定位置であるかのように、当たり前のような顔をして座った。

そして、私を横目で一瞥して軽く口角を上げると、すぐに「あ、白石さん戻ってきた!」と声をかけてきた新入社員の女の子たちの方へと身体を向けた。

「ごめんごめん、ちよつと電話しててさ」

陽向はフランクな笑顔で、女の子たちの会話に違和感なく混ざっていく。

その横顔は、爽やかで仕事のできる優秀な先輩そのものだ。つい数分前まで、外の暗がりでエロ漫画を読んでニヤニヤしていた男と同一人物だとは、誰も思わないだろう。

その完璧な二面性に、私はどこか薄ら寒いような、それでいて胸の奥がゾワゾワと泡立つような奇妙な感覚を覚えた。

陽向は普通に会話を楽しんでいるのに、私の頭の中では、どうしてもさっきの漫画の続きが気になってしまっていた。

あの後、あの二人はどうなったんだろう。どんな声を上げて、どんな風に……。

（……だめだめ、何考えてるの私）

どうしても意識がそちに引っ張られてしまい、下腹部の奥の方がじんわりと重く、熱を帯びてくるのがわかる。

私は後ろの壁にすっぽりと背中を預け、誰にも気づかれないように深く深呼吸をした。

忘れよう。とりあえず、目の前の新入生たちと話をして、この変な気分を上書きしなきゃ。

私は陽向の向こう側に座っている後輩たちに話題を振り、仕事のことや休日の過ごし方につ

いて楽しくおしゃべりを始めた。

少しして、話していた後輩たちが「ちよっとお手洗い行つてきまーす」と揃って席を外した。

二人きりになったわけではないが、目の前にいた子たちがいなくなったことで、私たちの周りだけがぽっかりと空間が空き、少し閑散とした雰囲気になった。

その途端、陽向が持っていたグラスをテーブルに置き、私の方へ少しだけ身体を傾けてきた。

「麗ちゃん、なんか顔赤くない？」

「麗ちゃんって呼ぶな。……お酒飲んだからでしょ。お店の中、ちよっと暑いし」

私は陽向と目を合わせないように、手元のグラスの氷をカラカラと揺らしながら答えた。

「ふーん……」

陽向は意味深に目を細めると、私の耳元に顔を寄せ、誰にも聞こえないような低い声で囁いた。

「お酒のせいじゃなくて……さっきの漫画のせいかと思った」

「っ！」

凶星を突かれ、私の心臓が大きく跳ねた。

「そんなことより明後日の案件は……」

私が必死に取り繕って仕事の話題にすり替えようとした、ちょうどその時。

「お待たせしましたー！」

後輩たちが楽しそうに戻ってきて、再び長机の下に足を滑り込ませた。さらに、別のテーブルで飲んでいた私の同期の男や女友達も「こっち空いてるじゃん」とグラスを持って合流してきて、私たちの席は一気に賑やかになった。

「麗、さつき席取っちゃってごめんねー！」

「ううん、全然大丈夫だよ」

私は友人の軽い謝罪に笑顔で応え、同期の男が話し始めたくだらない失敗談に相槌を打った。

周囲の喧噪。飛び交う笑い声。完全に「いつもの飲み会」の空気に戻ったことに安堵し、私は無防備に姿勢を崩した。

その時だった。

ふいに、掘りごたつの死角になっているテーブルの下で、私の太ももに温かい『何か』が触

れた。

「……っ？」

ビクッと身体を震わせ、視線を下に向ける。

長机の下に隠れた暗がり。そこに、陽向の大きな手が伸びてきて、私の太ももにピタリと触れていたのだ。

「ちよっ……何してんの……っ」

私は小声で抗議しながら陽向の顔を見た。

しかし陽向は、私の方を見向きもしない。正面に座っている後輩たちと「へえ、それマジで？ウケる」なんて談笑しながら、顔には爽やかな笑顔を張り付けたまま、手だけで私の太ももをまさぐり続けている。

いきなりのことで、思考が完全に停止した。

振り払おうにも、周囲には同僚たちがひしめき合っている。掘りごたつという密着した空間で、私が大きく動いて彼の手を振り払えば、間違いなく全員の注目を集めてしまう。

（どうして……白石くん、何考えて……）

私が身動き一つ取れないでいるのをいいことに、陽向の手はさらに大胆さを増していった。

私のオフィスカジュアルのズボン越しに太ももの内側を撫で上げていた彼の手が、ついにズボンの隙間から侵入し、直接肌を這って、そのまま下着の中へと滑り込んできたのだ。

掘りごたつの死角。薄暗い長机の下で、私のオフィスカジュアルのズボンの隙間から、陽向の大きくて熱い手が容赦なく侵入してきた。

「……っ!？」

肌に直接触れる男の指先の感触に、私は声にならない悲鳴を上げ、全身を硬直させた。

陽向の指は、私の太ももの内側を這い上がり、そのまま下着の縁をいとも簡単に押し下げて、最も無防備な場所へと滑り込んできたのだ。

（うそ、ちよつと、待って……!）

私はテーブルの下で必死に太もものを閉じようとした。しかし、隣に座る陽向の長い脚が私の脚の間に割り込むようにしてストッパーとなり、完全に逃げ場を塞がれてしまっている。

「あ、それ俺もわかる! 先週のプレゼン、マジで緊張したよね」

「ですよ! 白石さんでも緊張することあるんだって思っ、ちよつと安心しましたもん」

私の頭のすぐ上で、陽向と新入社員の女の子が楽しそうに会話を交わしている。

その声は信じられないほど爽やかで、いつもの『優秀で頼れる先輩』のトーンそのものだっ

た。私の同期の男も「お前、あの時噛み倒してたもんな」と笑ってツツコミを入れている。

誰も、陽向の右手が今どこにあるのか、微塵も気づいていない。

完全に日常の飲み会の空気が流れるテーブルの上とは対照的に、テーブルの下では、彼の長い指が私の下着の中の柔らかな粘膜を的確に捉え、撫で回していた。

(ひっ……！)

先ほどのテラスでの出来事が最悪の形で作用していた。

あの濃厚な漫画を読まされ、続きを想像してしまっていた私の身体は、自分でも信じられないくらい熱を持ち、ひどく湿り気を帯びてしまっていたのだ。

陽向の指先がその湿りに触れた瞬間、彼の指の動きがピタリと止まり、そして次の瞬間、まるで答え合わせをするかのように、意地悪く、そしてねつとりと複雑なヒダの裏側をなぞり始めた。

(あ、だめ……っ)

私は唇を強く噛み締め、必死に声を殺した。

ここで少しでも大きな声を出せば、あるいは激しく身じろぎをすれば、目の前に座っている後輩たちや隣の同期に確実にバレてしまう。

その絶対的な制約が、私の身体を金縛りのように動けなくさせていた。

動けないのをいいことに、陽向の指はさらに大胆になっていく。入り口付近の蜜を指先に絡め取り、それを潤滑剤にするようにして、最も敏感な蕾の突起をごりつ、と強めに弾いた。

「んんっ……！」

背筋を強烈な電流が駆け抜け、私はたまらず息を呑み込んだ。

頭が真っ白になるほどの快感。

だめだ、こんなこと絶対に許されるはずがないのに。身体は私の理性とは裏腹に、彼の与える刺激をスポンジのように吸収し、さらなる熱と蜜を溢れさせてしまう。

「白石さん、次何飲みます？ 頼んでおきますよ」

「あ、じゃあハイボールでお願い。濃いめで」

陽向はそんな会話を平然と交わしながら、指先では私を執拗に責め立てている。

私が快感に耐えきれず、テーブルの下で彼の手首を掴んで止めようとする、彼は私の手をもっと簡単に振り払い、逆に私の指と自分の指を絡め合わせるようにして強く握り込んできた。そして、空いた中指一本で、私の入り口を浅く、しかし確実な律動で出入りし始めたのだ。